

地域映像アーカイブ

研究代表者 原 田 健 一

一 「地域映像アーカイブ」について

新潟大学人文学部「地域映像アーカイブ」プロジェクトでは、新潟地域の生活のなかにある映像を発掘し、整理・保存を行い、デジタル化するだけでなく、その内容を整理、分析し、映像メディアの社会的あり方を考え直し、新たな社会の文化遺産として映像を甦らせるべく作業を行ってきた。

デジタル化が終わっている映像や音源は、着々とアーカイブ化されており、第一期として、二〇一二年五月より、写真約一万二〇〇〇点と動画約一四〇本を、第二期として、二〇一三年三月末より、写真約一万五〇〇〇点と動画約一五〇本を新たに加えた、写真約二万七〇〇〇点と動画約三〇〇本を新潟大学内で公開している。五年後には、総計で写真約一五万点、動画約一〇〇〇本、音源約一〇〇〇点の公開を予定している。

学内で見る場合は、「にいがた地域映像アーカイブ・データベース」<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/db/>にて、自由に見ることができる。なお、学外からアクセスする場合は、新潟大学「地域映像アーカイブ」のホームページ<http://www.human.niigata-u.ac.jp/ciap/>より入り、「地域映像アーカイブ」をクリックすると、使用するための申請書があり、それにて、申し込むと、一週間ほどで、IDとパスワードが発行される。

この公開は、試験的なものであり、ただちに一般公開をするものではない。研究、教育などに利用してもらい、映像検索などについての意見、さらには、こうした映像公開の規準について、さまざまな議論ができればと思っている。

なお、二〇一三年四月より、新潟大学内での公開のみならず、新潟県、新潟市の関連機関、新潟日報社メディアシップなど、連携している機関で順次、閲覧することが可能になった。今後も、小中高等学校、あるいは博物館、資料館、美術館、図書館などで利用できるよう、県市町村とも連携し、公開を推進する予定だ。

二 二〇一二年度のシンポジウム、展覧上映イベントの概容

1 砂丘館特別展示『私たちは、写真で、未来に、何を残せるのか?』

地域映像アーカイブと砂丘館、若手の写真家集団である夜韻の会の三者のコラボレーションによって、写真のもつ多様性、個々の視角から、現在をどんな風に掴まえ、イメージとして再構築できるのか。あるいは、映像という外部記憶装置を通して、わたしたちは未来にどんな記憶を残したいのか。こうした問題を考えるために、私たちは、過去と未来とが織りなす、新しい企画の写真展を、二〇一二年九月一九日（水）から一〇月四日（木）まで、砂丘館で開催した。

人は、なぜ、映像と戯れ、写真を撮ろうとするのか。フランスの文芸批評家であるロラン・バルトは、「写真」とは、「それは=かつて=あった」ものだとした。バルトが写真のこうした事実確認性をいうとき、問題にしているのは被写体のことだけではなく、写真を撮り、写され、それを見るという行為の関係性を含んだ時間、そのものを表したいと考えている。人間が抱く「写真を撮る欲望」とは、誰かが未来において、撮った写真を見るだろうことを予期し、未来に関わろうとして、撮影後、すぐに過去となる映像を生み出そうとしていることでもある。人間は、「未来のことを考えると心が乱れ、不安になるが、起源のことを考えると心が安らぐ」。写真は、未来と過去を繋げ、人間にとって、時間とは何か、また、人は未来に何を残すべきかを問いかける。

今回、展示した写真は、夜韻の会から会田法行、川口英克、下平竜矢、友長勇介、新納翔、湊庸祐、渡辺英明、E-Seolje、内野雅文、地域映像アーカイブより高橋捨松、中俣正義、砂丘館より牛腸茂雄が出品した。なお、一五日間で、八四五人の人が見に来てくれた。

2 シンポジウム「映像アーカイブー記憶の共有化と創造」

期間中の九月三〇日（日）午後二時から、砂丘館広間にて、シンポジウムを開催した。最初に佐藤守弘（京都精華大学）が視覚文化論の立場から、ロザリンド・クラウドとアラン・セクーラなどによる写真アーカイブ論を

紹介し、それに横浜写真、鉄道写真という二種類のジャンルをそれぞれケース・スタディとしてとりあげて写真とアーカイブの関係について報告を行った。それをもとに、研究する立場から原田健一、キュレーターの立場から大倉宏(砂丘館)、実作者の立場から下平竜矢(写真家)、渡辺英明(写真家)、司会は石井仁志(二〇世紀メディア評論)にてディスカッションをした。映像から漂ってくる懐かしさをめぐって、研究者、キュレーター、実作者など、立場を越えて写真をめぐる問題についてさまざまな議論を活発に行った。

3 第一〇回市民メディア全国交流集会「くびき野メディフェス二〇一二」

また、一〇月二七日(土)から二八日(日)まで、高田世界館、町屋交流館「高田小町」、高田駅前コミュニティホール、上越ケーブルビジョン(JCV)のスタジオで行われた、第一〇回市民メディア全国交流集会「くびき野メディフェス二〇一二」に参加した。

市民メディアは、大手新聞社やテレビ局などのマスメディアからこぼれ落ちてしまうような出来事や事象を市民の視点から取り上げ、広く市民へと伝えていくことを主な活動としてきたものであった。こうした市民メディアの役割は、マスメディアを同時代的に補完し、対抗してきた。

一方で、これまでの市民メディアでは、時間を超えて未来の市民へとその活動の成果を伝えていこうという意識は比較的希薄であった。しかし、とりわけ多くの市民メディアが持つ地域性という特徴を考慮するならば、市民メディアが取材・伝達の過程で記録・保存してきた写真やフィルム、ビデオなどの映像をアーカイブとして保存・整理し、未来の市民がさまざまな目的において活用できる形にしておくことは、地域コミュニティにとって有益なことだといえる。そうした観点から、分科会の一つとして、「市民メディアと映像アーカイブ」を新潟大学人文学部共催で行った。

一〇月二七日(土)午後三時三〇分より五時三〇分まで、上越ケーブルビジョン(JCV)のスタジオにて、司会北村順生で、原田健一、水島久光(東海大学)、北野央(せんだいメディアテーク)の三者が自らの映像アー

カイクの活動について報告し、会場の参加者の質疑に答える形で議論を行った。

三 研究の成果の一般への発表・公開

このプロジェクトの試みは、NHK新潟局では、二〇一二年四月一八日に、夕方六時一〇分から五〇分までのニュース番組で、地域映像アーカイブの活動を紹介してから、新潟地域の映像を発掘するシリーズとして、地域映像アーカイブの映像や活動を、五月二四日、九月三日、十月一日、十一月二日に放映してきた。

その総特集として、二〇一三年四月二二日に原田がインタビューを受ける形で、地域映像アーカイブの考えや仕事について話をした。四月二六日には、午後七時三〇分からの三〇分番組「きらっと新潟」で、地域映像アーカイブデータベースの映像をもとにし、さらには映像の内容について、一九五五年三月一六日塩沢町中之島村から土樽駅に向かう花嫁行列の内容を特定するために一緒に取材、調査を行うなど、緊密な関係のもと番組の制作をおこなった。放映後、かなりの反響があり、視聴率は一三・八%であった。

全国放送では、二〇一三年三月三〇日、NHK BS3「ムカシネマ」においても、地域映像アーカイブデータベースの映像がとりあげられた。

また、四月一二日からオープンした新潟日報メディアシップの一階に設置された新潟日報情報館 COMPASS に地域映像アーカイブより動画を中心に、中俣正義が県観光課で製作した『雪国の生活』などの映像を提供した。四月から七月にかけ、一カ月の集計では約五七〇〇人で、平日が一〇〇～一五〇人、土日が二五〇～五〇〇人の人びとが訪れ、これらの映像を観ている。

最後に、この研究プロジェクトの中間報告として、九月に『懐かしさは未来とともにやってくる — 地域映像アーカイブの理論と実践 —』（学文社）を刊行した。執筆者は、本プロジェクトのメンバーに加え、研究会、シンポジウムに参加し発表した研究者、キュレーター、プロデューサーなどによる。章立ては以下の通りである。

はじめに

- 第1章 地域・映像・アーカイブをつなげるための試論 原田健一
- 第1部 「にいがた」という地域の映像を分析する
- 第2章 事例としての「にいがた」— 地域の映像をめぐる4つのフェーズ
原田健一
- 第3章 小さなメディア? 絵葉書 石井仁志
- 第4章 地域の肖像 — 新潟県観光映画と中俣正義 石田美紀
- 第2部 映像をデジタル化し共有化する
- 第5章 地域の映像をどう整理し使うか — 十日町の事例 高橋由美子
- 第6章 映像のインデキシングの実際 中村隆志・佐々木岳人
- 第7章 デジタル映像アーカイブをめぐる知的財産としての権利 古賀豊
- 第3部 映像をデジタル化し創造する
- 第8章 動画、音声のデジタル化の実際 松本一正・渡辺一史
- 第9章 デジタル映像の展示の可能性 — 「今成家写真」展における映像アーカイブ資料の活用を事例として 榎本千賀子
- 第10章 共有化される映像展示の場所 石井仁志
- 第11章 美術館において写真アーカイブは成立するのか? 金子隆一
- 第4部 アーカイブでつなげる
- 第12章 写真とアーカイブ — キャビネットのなかの世界 佐藤守弘
- 第13章 地域メディアと映像アーカイブをつなげる 北村順生
- 第14章 アーカイブとアーカイブをつなげる — 連携の諸相・その必然性
水島久光